

2016年(福祉特集その7) 特集 留岡幸助 とキリスト教

あなたの神、主の命令を守って、その道に歩み、主を恐れなさい。(申命記8章6節)

昨年2月川崎で起きた、中学1年生が川で無理やり泳がされ、殺された記憶も消えない中で、先月同様な事件が少年らによって起こされてしまいました。事件の報道を見るたびに彼らのこれからの長い人生においてその心の「傷」をだれが癒していくのかと心痛める思いであります。



明治時代に「人間社会には2つのくらやみがある。一つは遊郭であり、もう一つは監獄である。そこに光を照らすべき」と主張した青年がいました。**留岡幸助というクリスチャン**です。日本で最初のいわゆる「感化院」を創設した人物ですが、一般の人には知られていません。保育士の模擬試験問題で日本の福祉に関する人物を結び付ける問題に、以前この通信で紹介した**石井十次・石井亮一**とともに留岡幸助名がでておりました。その答えは「**家庭学校**」です。北海道の東に人口2万人ほどの町遠軽に**北海道家庭学校**があります。児童福祉の原点がここにあると福祉を目指す人たちが訪れています。



この学校の教育の原点とはなんなのでしょう。北海道家庭学校校門 留岡幸助という人物はどのようにしてこの学校を創立したのでしょうか。広大な大地で活躍したクリスチャンを紹介します。

ワンポイント 愛 その⑧ 皮の衣は神の犠牲愛の象徴

なんと神はあわれみ深いお方でしょう！神はご自分にそむいた二人に皮の衣を作って与えられました。神を捨てて、サタンのもとに去って行った者のためにです。でも、愛とは元来こういうものなのです。真実の愛は、その受ける価値のないものにも、一方的にそそがれるのです。しかし、人間の知った愛は、自分にとって「良いもの」「慕わしいもの」「好ましい者」だけを愛する自己愛です。この人間のエゴ愛にそそがれる神の無限の愛が聖書のテーマなのです。

いちじくの葉をつづったおおいは、彼らの精一杯の労作だったでしょうが、それはまことに粗末で、一時しのぎのものにすぎませんでした。

それに比べると、神がお与えくださった皮の衣は、それこそ完全な覆いでした。しかし、その衣を作るために、獣が犠牲になったのです。すべてが完全の平和のなかで神が造られたエデンの楽園で、獣の血が流された事は、神はその犠牲を払っても、なおも愛をもって人間の恥を覆うという、神の犠牲愛を象徴しているのです。

バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。
ガラテヤ3章27節

あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。
黙示録3章18節

神である主はアダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。
創世記3章21節



定期集会

日	礼拝と学び	10:30~	水	聖書の学びと祈禱会	19:30~
	教会学校	13:30~14:30			
	夕拝	19:30~	金	聖書の学びと祈禱会	10:00~

どなたでもおいで下さい

〒213-0023 川崎市高津区子母口776

編集

日本同盟

子母口キリスト教会



発行

基督教団

e-mail shibokuchi@church.jp

牧師 小岩井 信

http://shibokuchi.church.jp/

電話 044-766-0181

FAX 044-766-2157

一路白頭に到る。(白髪になるまで一途の道)

留岡幸助

生い立ち

留岡幸助は1864年(元治元年)4月9日備中松山藩(今の岡山県高梁市にて吉田万吉・トメの間に生まれましたが、子だくさんの家であったために、子供のいない米屋の留岡家に養子に出されました。小学生の時、元武士の家の子との口論から喧嘩となり、相手が木刀で殴りかかったが、自分には罪がないのに、武士には歯向かってはならぬという父の教えを守り、痛さにこらえていたが、とうとう堪忍袋の緒が切れて、とっさに相手の左手に噛みついてしまったのでした。その事が原因で、家業の商売が行きづまり、養父との仲が折り合わなくなっていました。

クリスチャンに

16歳の時に、「西洋の軍談」を聞くために、集会に出て初めてキリスト教の世界を知りました。「**宇宙には神という唯一神がいる。士族の魂も町人の魂も神の前に出るときには、同じ価値を持っている。**」という教えは、小学生の時に味わった幸助の心を完全に捉えました。洗礼を受けたのです。養父は大のキリスト教嫌い。棄教を迫りました。しかし幸助は頑なに拒みました。養父は幸助を座敷牢に閉じ込めたそうです。隙を見て幸助は脱走し、**新島襄によって高梁に開かれていたキリスト教会**に逃げ込み、そこで**福西志計子**(幼名 しげ)に匿われました。福西志計子は男女平等の教えであるキリスト教に出会い女子教育の先駆者として広岡浅子とともに有名です。福西志計子と新島襄とのつながりから、幸助は京都の**同志社英学校**に入学しました。新島襄の薫陶を受け1888年に卒業丹波第一教会(福知山)に赴任し、1889年に**夏子と結婚**しました。二人の間に長男が与えられた直後の1891年に大きな転機が来しました。



福西志計子

教戒士として北海道へ

北海道空知にあった監獄の受刑者の心のケアをする教戒士になってほしいという依頼が入ってきました。社会の暗部に光をと願っていた幸助にとっては願ってもない話でした。300人いた囚人の大半は少年時代から罪を犯している事に気づいた幸助は、少年感化の必要を悟り、さらなる勉強の思いを抱いたのでした。**家財道具を売り払い同僚や宣教師からの寄付を仰ぎ日本を飛び出していきました。幸助30歳の時**でした。最初はコンコルド感化院に行きました。その感化院監獄は一種の技能教育学校でした。次の施設**エルマイラ感化院**では、その後の幸助の理念を決定づ



新島 襄

ける監獄事業一筋に生きてきた**ブロックウェー**に出会いました。ブロックウェーの口癖は「**わたしはただ感ひとつの事をしていただけです。**」でした。

巢鴨に家庭学校設立

「人は刑罰によって善良になるのではない。君子になるか、盗賊になるかは家庭における陶冶による。」この教えを留学時代に確立した幸助は帰国後金策に走り回り1899年に**巢鴨に家庭学校を作り**ました。その半年後、5人目の子供を産んだ**妻夏子が病に倒れ召天**してしまいました。幸助はジレンマにさいなまれましたが、家庭学校は自分の戦場である。どんな困難があっても、この事業の継続が妻への記念碑となるのだと心を決めました。15年巢鴨での実践が実り出しました。卒業生の大半は社会復帰を果たし改善率7割は当時としては画期的でした。

理想を求め北海道に

「**教育は自然と人間との協同作業**」が幸助の持論であったので、若い頃、厳しい北海道自然との闘いの中で生きた体験が新たな望みへと幸助を駆り立てました。「**自然は人間を差別しない。非行少年でも正直に労働さえすれば葱やイモは良く育つ。ねぎやイモは彼らを非行少年とは見なさない。**」の考えは当初地域住民には理解されませんでした。数多くの妨害もあったそうです。幸助ら教師が先頭に立って原野に道路を作り、農地を開墾しました。その姿を見て地元からの協力が生まれ、今は地域の誇りとなっています。1934年70歳でその生涯を全うしました。かつて同志社で学友であった徳富蘇峰は追悼のなかで「君ありて、キリスト教は社会化され、日本化された。無私にして勤勉、努力の人、日本の忠僕であった。」とその功績を讃えました。

チャペルには右の額があります。「**難儀はきっとあなたに有意義をもたらす**」という教えで、ありがとうと読みます。



家庭学校チャペル

